

デーリー東北

2026年(令和8年)8月19日(水曜日) (9)

映画監督の木下恵介をご存じだろうか。黒澤明と同じ年にデビューし、共にその年の最も優れた新人監督に贈られる山中貞雄賞を受賞。日本初のカラー映画『カルメン故郷に帰る』で大きな話題を呼んだ。しかし、いつしか「忘れられた映画監督」と呼ばれる存在になってしまった。木下監督の『檀山節考』は、人生で初めて観た日本映画だ。大学の「日本映画監督研究」という授業で出合った。姥捨伝説を題材に、歌舞伎の様式美を大胆に取り入れ、全編をあえてセットで撮影。美しくも恐ろしい世界観に衝撃を受けた。それが、日本映画をもっと学ぶため留学するきっかけとなった。そして大学院修了後に受け入れてくれたのも、木下監督の記念館だった。「中国と深い縁を持つ木下監督だからこそ、戴さんの視点から、木下監督と木下映画を紹介してほしいかった」。外国人

私と木下恵介の春夏秋冬

—— 戴 周杰



の私を採用した理由を、館長が教えてくださった。木下監督は、戦時下の中国大陸へ出征した。負傷によって軍隊生活は半年ほどで終わったが、その体験は生涯にわたる反戦思想の原点となった。終戦後には2度にわたり

日本映画人代表団を率いて中国を訪れ、日中の文化交流にも尽力した。そして、戦場体験をもとに執筆した『戦場の固き約束』は、未完成のまま遺作となった。そんな木下監督の記念館だからこそ、中国人の私にしかできないことがきつとある。だが、現実は厳しい。

著作権保護のため
画像は表示できません

「種差」
工藤勝幸 (八戸市)
＝第65回チャータール会八戸展＝

記念館では毎月、定例上映会が開かれていたが、上映後の解説を担当した。めめた頃は、来館者も少なく、解説を聞かずに帰ってしまう方も多かった。中国人であるというだけで心ない言葉を浴びせられることもあった。閉館後の誰もいない上映ホール。その静けさの中で、「偉大な木下監督の記念館に、私は本当に必要なのだろうか」と、自問自答する日々が続いた。1年目の終わりに帰国も考えたが、松竹撮影所に入ったばかりの木下監督が母・たまから贈られた「石の上にも三年」という言葉に、私も支えられた。状況がすぐに好転したわけではないが、それで多少しずつ、「日本人の視点とは異なる解説が面白かった」と声を掛けてくださる方が現れるようになった。時間をかけて準備した展示に「勇気をもらいました」と話してくださる方もいた。『日本の悲劇』『二十
四の瞳』『惜春鳥』『破戒』……。木下監督は生涯をかけて、社会的に弱い立場に置かれた人々を描き続けた。女性や子ども、性的マイノリティー、被差別部落。声を上げることでできない人々の存在を、スクリーンの上に確かに刻んでいた。私も、まさに木下映画に救われてきた一人だった。退職前最後の上映会は、思いがけず満席となった。常連の皆さんから頂いた花束とメッセージカードは、私と木下監督が共に歩んだ5年間の春夏秋冬を証明してくれる、かけがえのない贈り物だった。記念館の事務室に貼られている、木下監督生誕100周年記念事業のポスター。そのキャッチコピーが、私は今でも大好きだ。「人生は、いろいろあるから美しい」(たい・しゅうき)八戸工業大感性デザイン学部助教、中国湖南省出身、八戸市在住)

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。